

# しず 清水遺跡(2・3地区)発掘調査説明資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成23年11月3日

## 調査要項

遺跡名(番号)	清水遺跡(平成11年度登録)
所在地	山形県村山市大字名取字清水北
時代・種別	縄文時代、平安時代 集落跡
起因事業	東北中央道(東根～尾花沢間)
調査依頼者	国土交通省山形河川国道事務所
調査機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	2地区 平成23年5月9日から11月11日まで 3地区 平成23年5月9日から12月2日まで
調査面積	2地区 2,260㎡ 3地区 5,700㎡
調査担当者	2地区 主任調査研究員 齋藤健(現場責任者) 高橋敏 調査員 山田めぐみ 後藤枝里子 3地区 専門調査研究員 氏家信行(現場責任者) 調査研究員 庄司昭一 調査員 渡部裕司 濱松優介 齋藤和機

## 調査成果(10月21日現在)

### 2地区

検出遺構 平安時代：竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 川跡  
出土遺物 平安時代：土師器 須恵器 金属器 羽口 木製品

### 3地区

検出遺構 縄文時代：陥穴 土坑  
平安時代：竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡 土坑 溝跡  
出土遺物 縄文時代：縄文土器 石器 石製品  
平安時代：土師器 須恵器 黒色土器 羽口 木製品

## 1 調査の概要

清水遺跡は、村山市東部の最上川が蛇行する右岸部にあり、清水地区のなだらかな丘陵の東斜面上に位置する縄文時代と平安時代の広大な遺跡です(図1)。すぐ近くには県道村山大石田線が走り、さくらんぼカントリークラブゴルフ場にも隣接しています。

調査区周辺は、かつては雑木林であったも

のを戦後に桑畑として切り開いたものです。その後に耕地整理を行い畑地に改修されました。その際、調査区の一部が削りとられています。

今回の調査は、22年度に引き続き東北中央道(東根～尾花沢間)の建設工事に伴って行なわれたものです。遺跡範囲が広いので、昨年度「清水遺跡(2)」として調査を実施した部分のA区を2地区、B区を3地区、E区

を4地区の三つに分けて調査を実施しました。

4地区は、9月上旬に調査が終了しており、今回は2地区と3地区の調査説明を行います。

5月から始まった調査では、重機で遺構を確認できる深さまで表土を除去した後、人力で土を削って(面整理作業)、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構を確認しました。その後、遺構を掘り下げ出土した土器等を図面や写真に記録していきました。



図2 調査区概要図(1/2,000)



図1 遺跡位置図(1/50,000)



写真1 面整理作業(3地区)



写真2 竪穴住居跡 ST276 掘下げ作業(2地区)

## 2 見つかった遺構と遺物

### 清水遺跡(2地区)

23年度は22年度同様、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されました。

竪穴住居跡 ST141・276 は丘陵の斜面を造成して作られていました。しかし、耕地整理により半分以上が削られていました。

竪穴住居跡 ST9 は火災で焼けたもので、炭化した骨組の木材や屋根材、さらに壁際に板材を埋め込んで壁とした痕跡を確認できました。カマドの脇からは鉄製の紡錘車<sup>ぼうすいしや</sup>が出土しました。隣接する竪穴住居跡 ST10 の壁際にも杭を打ち込んだ痕跡を確認でき、板を並べて壁としていたものです。また、床面からは鉄製紡錘車<sup>ぼうすいしや</sup>が出土しています。

丘陵の谷筋からは沢状の川跡が検出され、堆積した火山灰の下から遺物が出土しています。土器の中には灯明皿<sup>とうみょう</sup>に使用し内部に媒が付着したものや、裏や側面に「六」、「寺」などの文字を書き込んだ墨書土器<sup>ぼくしよ</sup>も確認できました。さらに食器の破片や建材の一部、端材などの木製品も出土しています。

川跡や竪穴住居跡では、火山灰が厚く堆積した層が見られます。これらは、平安時代に

編纂された史書『日本三代実録』の中に915年に出羽国に火山灰が降ったと記録があり、この火山灰は十和田火山の噴火によるものと考えられています。このことから、多くの遺構は10世紀初頭にはすでに廃絶していたと推測され、9世紀が中心とみられる出土した遺物の年代ともほぼ合致します。

### 清水遺跡(3地区)

縄文時代では<sup>おとしあな</sup>陥穴と石器を集めていた様相を示す土坑があり、平安時代では掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土坑、溝跡などが見つかりました。

縄文時代の陥穴 SK1154 は調査区の南東隅に位置し、昨年調査したB区で確認された3基の陥穴に続くものと考えられます。

また、石器を集めていた土坑からは原石を打ち欠いた剥片<sup>はくへん</sup>が150点程出土しました。

平安時代の遺構は竪穴住居跡が現在まで12棟確認されています。その規模は、約3～4m四方の大きさで、深さは確認面から浅いもので15cm、深いものでは40cmを測ります。竪穴住居跡 ST1053 にはカマドの付け換えが見られました。竪穴住居跡 ST1140 のカマドは近年の抜根により破壊されていましたが、多くの遺物が出土しました。



写真3 丘陵の斜面に広がる2地区全景

掘立柱建物跡も15棟確認されています。その規模と数は、2間×2間が最も多く5棟、3間×2間は3棟、3間×3間と2間×2間の中央にも柱をもつ総柱の建物が2棟で、1間×1間と1間×2間が1棟です。そのうち9棟が調査区中央の西側に集中しています。この集中区域の建物跡は、規模に比較して柱穴の掘り方が大きいことが特徴で、中には1mを超える掘り方の建物も見つかりました。建物群は、その規模から倉庫跡と考えられます。

井戸跡は2基確認されました。SE1051 は直径1mの隅丸方形で深さは1.5mを測ります。底から木製品が出土しました。

土坑は直径2mを測る大きいものも見つかりました。SK1025からは多くの土器片が出土し、SK1048には915年に噴火した十和田火山の火山灰が堆積していました。また、調査区内で屈曲する溝跡 SD1054・1061 は集落を囲む区画溝の可能性が考えられます。

遺物は、縄文時代の石鏃<sup>せきぞく</sup>、石筥<sup>いしへら</sup>などの石器や凹石<sup>くぼみ</sup>、装飾品と思われる孔があげられた石製品と今から約4,500～3,300年前のものと考えられる縄文土器が出土しています。

平安時代の遺物は、素焼きの土器で赤褐色の土師器<sup>はしき</sup>と窯で焼かれた灰色の須恵器<sup>すえき</sup>が多く出土しました。蓋<sup>ふた</sup>や坏<sup>つぎ</sup>、高台付坏<sup>せきぞく</sup>、甕<sup>かめ</sup>などが多くみられます。坏の底部の切り離し痕は回転糸切りが多数を占め、中には、黒色処理がなされた黒色土器や文字が書かれた墨書土器などもあります。また、金属を精錬するさい、炉に風を送り込むフイゴ(送風機)<sup>はぐち</sup>の羽口も出土しています。

出土した土器の切り離し痕や形から集落は概ね9世紀末を中心とした集落であることが分かりました。



写真4 3地区の掘立柱建物跡の柱穴掘下げ

## 3 まとめ

清水遺跡の2・3地区は、22年度からの調査の結果もふまえると、縄文土器や石器などの遺物と陥穴などの遺構から、約4,500～3,300年前の縄文時代後期の狩り場であったこと、さらに、今から1,100年前の平安時代の集落跡であったことが分かりました。

各地区には特徴がみられます。2地区は竪穴住居跡を中心とした集落で、斜面地をわざわざ造成してまで建てられた住居や、10m四方を超える当時としては大型の住居跡があります。

3地区は掘立柱建物を中心とした集落です。ただし、今回確認された掘立柱建物はその規模から倉庫跡と考えられるもので、集落の範囲はさらに西側に延びると推測されます。両地区から出土したフイゴの羽口は、鍛冶工房<sup>かじ</sup>が周辺にあることを窺わせます。

今後は、これまで検出した遺構や遺物を詳細に検討し、集落の変遷を明らかにしたいと思います。